

原文

伊勢物語「芥川」

むかし、をとこありけり。女の、え得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。芥川あくたがはといふ河を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となんをとこに問ひける。行く先多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らず、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓籙ゆみやなくひを負ひて、戸口に居り。はや夜も明けなんと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に喰ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御にようじの御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄堀河おととの大臣、太郎国経くにつねの大納言だいなごん、まだ下臈げらふにて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるをききつけて、とどめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

口語訳

伊勢物語「芥川」

昔、男がいた。女性で、自分のものにできそうになかったのを、長年求婚し続けたが、やつとのこと（その女性を）盗み出して、とても暗い夜に連れて來た。芥川という川のほとりを連れて行ったところ（女性は）草におりていた露を「あれは何か」と男に尋ねた。行先は遠く、夜も更けてしまったので、鬼のいる所とも知らないで、雷までもが大変ひどく鳴り、雨も激しく降ってきたので、荒れ果てた蔵に、女性を奥に押し込んで、男は、弓（を手に持って）籙を背負って、扉の前にいた。（男は）早く夜も明けてほしいと思いついたところ、鬼はたちまち一口に（女性を）食べてしまった。（女性は）「あれえ」と言ったが、雷が鳴る騒がしきで、（男は）聞き取れなかった。次第に夜も明けていくので、（男が蔵の中を）見ると連れてきた女性もいない。（男は）地団駄を踏んで泣くがどうしようもない。

白玉か……。「（あれは）白玉ですか、何ですか」と女が尋ねたとき、（私は）「（あれは）露だよ」と答えて、（その露のように）消えてしまったらよかったのに。（そうすれば、こんなに悲しい思いをしなくてすんだらう。）

これは、二条の后が、いとこの女御のお側に、お仕え申し上げるような形で住んでいらっしやったが、（二条の后の）容貌がとても美しくていらっしやったので、（男が二条の后を）盗んで背負って逃げたのだが、（二条の后の）兄君の堀河の大臣、太郎国経の大納言が、まだ官位が低い身分であり宮中へ参上なされるときに、ひどく泣く人があるのを聞きつけて、（車を）止めて（二条の后を）取り返しなされた。それをこのように鬼と言ったのだ。二条の后がまだとても若くて、普通（の身分）でいらっしやったときのことだとか。